

2024年度国際日本学コンソーシアム【報告要旨】

報告テーマ：引用導入表現「Xが言う・思うには」に関する一考察

北京外国語大学・日本学研究センター

帥翹

本研究は、日本語における引用表現「Xが言う・思うには」の統語的および語用的特徴を分析し、その新たな言語的機能を明らかにすることを目的とする。本構文は従来の引用表現「XがYとV」（X=発話者、Y=引用内容、V=引用動詞）とは異なり、引用詞「と」を欠きつつも引用の機能を果たす点に独自性がある。特に、引用動詞が副詞節的な役割を担い、「XがYとV」との互換性が文脈によって異なるのが特徴である。この「XがVに、Y」構文が現代日本語においてどのように使われ、どのような意味的効果をもたらしているかを理解するため、現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）を用いて調査を行った。

調査の結果、「Xが言う・思うには」の形式特徴やそれを取り巻く文脈環境以下の通りである。「Xが言う・思うには」が文頭に配される副詞節であり、ガノ交替が可能で、また文頭だけでなく命題の中に挿入されることもある。のちにくる引用内容の表現に「という」「らしい」などの伝聞マーカーが頻繁に用いられる傾向が見られた。また、「Xが言うには」の場合、「Xが～と言う」と置き換えることができる。置き換えられるときは対話をより緊密につなぎあわせる機能を持つ。置き換えられない場合は、ただ情報源提示の機能を発揮し、Xの発話者としての性質が背景化される。「Xが思うには」の場合になると、よく文頭に現れ、背景化される地の文と発話者の観点の境目を示す役割を果たす。さらに、この構文は引用内容の強調手段として、副詞節的に文全体に影響を与える機能を持っている。引用句を「と」を介さずに提示することで、引用内容が単なる情報の再現にとどまらず、発話者が自身の意見や見解を強調し、相手に対する説得力を高める効果をもたらす。

考察の範囲をさらに拡大すれば、「Xが言う・思うには」は接続助詞ニの用法と緊密に関連していることがわかる。発話・思考とかかわる動詞がよく接続助詞ニの前に現れ、思考過程と結果をつなぎ合わせる。この機能は、さながら「Xが言う・思うには」に反映される思考過程と同じである。